

『円の一角に突起をつくれ!』(故 岸本 正 名誉教授より)

大 迫 淳
(中央区・ご本人)



本人高校時代

偶然の出会いから娘を授かり、何かのかけ違いで父子家庭に…

家庭を持ち、開業し、子育てもしながらだった医院は25年を迎えようとしている。

それ以前は、今でも時々集まる小、中、高の仲間との思い出。家族よりも同じ時間を過ごした大学生活の6年間。

収入もなくひたすら顕微鏡をのぞいていた大学院時代…なぜかその日その日を忘れるための酔いに浸る日銭はあったようだ。

こうして原稿に向かっていても頬を緩める思い出が先に浮かんでくる。

60年…本当にいろんな経験をしたもんだ。

毎日の家事はもちろん、保育園への朝夕送り迎え…、学童保育連絡協議会のメンバーとして対市交渉…、PTA 会長として…、ついに矯正歯科の仕事では公益社団法人広報担当理事に選ばれ毎月2回の東京での日帰り会議…。

その都度自分の未経験を思い知らされ、慌てて学び、成長させられてきたような気がする。

冒頭、『円の一角に突起をつくれ!』

この教えも大学院当時に、恩師 岸本 正 矯正学教室教授からいただいた。

顕微鏡を覗いている夜中にも酒の席にしょっちゅう連れ出され、ひたすらお話を、説教をされていたが、私にとっては決して悪い思い出ではなく、あちらの世界でも時々ならお会いし、この言葉の真意をお聞かせいただきたいと思っている(どの場でも人が集まると円ができる。その輪も大切だが、円の中でも秀でたものであれ!…とは聞かされていたが…?!)。

似たような言葉がある…

『丸くとも 一かどあれや 人心

あまりまろきは ころびやすきぞ』

これは私も夢中にさせられた『竜馬がゆく』の中で主人



母親と娘

公竜馬の言葉としてよく知られているが、よくよく調べてみると大元は一休宗純の『譬喩尽』。

『円くとも 一角あれよ 人心

あまり円きは 転び易きぞ』…一休さんだ。

(温厚で周囲と調和できる円滴な性格は素晴らしいが、たまに怒ったり、少々頑固さなど、少しくらいは角があったほうがよい。)

これまでの私そのものだが…今はまだ59、私には角がいくつも残っているようだ。

『60』ついでに、一休さんらしい辞世の句。

『朦々然而三十年 淡々然而三十年

朦々淡々六十年 末期脱糞捧梵天

借用申昨日昨日 返済申今日今日』

(ムラムラ、モヤモヤして六十年。末期の糞をさらして天に捧げる：人間なんてそれだけのことだ。借りていた五つのもの(地水火風空)のうち四つを返し、人間本来のありようである空だけが残る：命はほんの少しの間借りていただけなのだから、今天にお返しします。)

コロナが明け、私も60を迎えるにあたり、ワイン仲間の医者のもとに5年ぶりの「人間ドック」…

『糞を捧げてきた。』

まだまだ元気なようである。つい先日、娘も来年早々入籍するとの報告…まだまだ新たな経験に出会えそうだ。

ますます転がり続けて角を落とそう。

『まだ死にとうない!』…一休最期の言葉。